太宰治・初期習作の再検討

—全能への志向・価値転倒的操作・否定の機序の観点から—

Restudy of Osamu Dazai's early works

高橋宏宣

福島工業高等専門学校一般教科

Hironobu Takahashi

Fukushima National College of Technology , Department of General Education

（2012年9月21日受理）

In this article I analyze Osamu Dazai's five early works whose titles are "The last Taiko" "A false show of power" "The map" "Hating to lose and being defeated" and "My work". They were written when Dazai was a student of Aomori junior high school. I show three important elements of his early works. The first is ambition to almightiness, the second is a sign of the inverted value operation, and the third is mechanism of denying the reality. Finally I refer to the importance of Osamu Dazai's early works.

Key words: Osamu Dazai, early works, Aomori junior high school

太宰治の作品世界が如何なる機序の下に成立しているかに関しては、奥野健男による「反逆の倫理としての「下降志向」」や「コミニズムからの陥没意識」「コミニズムに対する罪の意識[1]」の指摘をはじめとし、これまで多くの評者によって論じられてきている。その中で、磯田光一は次のように述べている。

そしてここで、太宰の作品群に目を転じるならば、彼の絶望的な抒情でさえも、こういう〝至福状態〟（筆者注・『津軽』での「たけ」との再会場面を指す）への逆説的な探索の道であったことが明らかになろう。彼の左翼運動への参与でさえも、「日蔭者」どうしの間に築かれるべき「愛」の至福状態の探索ではなかったであろうか。彼の女にたいする態度のうちにも、同様の傾向を見いだすことは容易である。そして、彼の探索が深くかつ強いものであればあるほど、その欲求は満たされることがない。夢のないところに、幻滅も絶望もありえはしない。太宰の初期作品に見られる絶望的な抒情は、絶望を通じて「夢」を証明しようとする逆説的な操作に裏づけられている[2]。

「至福状態」に対する「深くかつ強い」「探索」の果てに、「満たされることがない」「欲求」という現実に逢着して「幻滅」や「絶望」を感じざるを得なかった太宰が、「愛」や「夢」の理想を「逆説的な操作」によって希求しようとした道筋を磯田は見据えている。磯田はこうした「思想の逆説性」を中期の「駈込み訴へ」のユダや、後期の「桜桃」の父親の姿にも見い出している。自らを託すことのできる現実を求め得ないがために、仮構された現実の中で理想を追求しようとした太宰が、現実との摩擦によって受けた癒されることのない傷を媒介として自己を規定していったのは、自然な趨勢であったと言えよう。

ところで、太宰の「思想の逆説性」を指摘した磯田と、次に引用する太宰治に対する激しい嫌悪を表明した三島由紀夫とは、現実に於ける理想の実現不可能性を太宰が創作の培養基とした点に着目した限りに於いて、さほど隔たってはいないと言える。

私として、作家にとっては、弱点だけが最大の強味となることぐらゐ知つてゐる。しかし弱点をそのまま強味へもつてゆかうとする操作は、私には自己欺瞞に思はれる。どうにもならない自分を信じるといふことは、あらゆる点で、人間として僭越なことだ。ましてそれを人に押しつけるにいたつては！（中略）

私には文学でも実生活でも、価値の次元がちがふやうには思はれぬ。文学でも、強い文体は弱い文体よりも美しい。一体動物の世界で、弱いライオンのはうが強いライオンよりも美しく見えるなどといふことがあるだらうか。強さは弱さよりも佳く、猛固な意志は優柔不断よりも佳く、独立不羈は甘えよりも佳く、征服者は道化よりも佳い。太宰の文学に接するたびに、その不具者のやうな弱々しい文体に接するたびに、私の感じるのは、強大な世俗的徳目に対してすぐ受難の表情をうかべてみせたこの男の狡猾さである[3]。

三島は太宰の「弱点をそのまま強味へもつてゆかうとする操作」、即ち本来生活に於いて克服されるべき人間としての弱さを、文学に於ける価値あるものへと掏り替えていく価値転倒的操作[4]に対し、激しい非難を加えている。しかし、饗庭孝男氏が三島の評言に「感受性の基盤において太宰と変わるところがない世界[5]」を認めたように、この批評は価値転倒的なものに自覚的であった両者の同質性をはしなくも露呈したものとも言える。価値転倒的操作が人間の感受性にどれほど大きな影響を与えうるかについて、太宰も三島もよく知っていたのであり、その使用を太宰は諒とし、三島は否とした。太宰は現実に於いては理想の実現可能性を奪われた存在として自己を規定し、「愛」や「夢」の貴さを自らの弱さから「逆説的」に描こうとしたのに対し、三島はその逆説性への衝迫を認めつつ、しかしそれは「想像力」の衰退を齎すとして忌避した。この批評で三島が問題としたのは、直面する現実とどのように対峙し、そこから創作のための「想像力」をどのように起動させていくのかという、創作態度についての倫理であった。

術語こそ違えども、太宰文学の逆説性や価値転倒的操作に関し、これまで繰り返し言及されて来た。し

かし、それらが太宰の資質とどこまで地続きで、どこからが外的要因によって後天的に獲得されたものであるかについて、十分に検討されてきたとは言い難い。太宰治は逆説性や価値転倒性の意匠を携えて文壇に登場したが、旧制青森中学二年時に始まって「学生群」の連載が途絶する昭和五年に至るまでの習作期に、その基礎がどのように形成され、変成を遂げていったのかの検証は、今なお残されたままなのである。

本稿は、太宰治の習作時代、特に旧制青森中学二年から四年にかけての大正十四年・十五年の初期習作（「最後の太閤」「虚勢」「地図」「負けぎらひト敗北ト」「私のシゴト」）にフォーカスし、価値転倒的操作の萌芽が当時既に胚胎していた事実を明らかにし、それと関連する全能への志向、否定の機序という特徴も合わせて指摘する。以上を通じ、太宰治の初期習作の担う意義について考察を加えることとしたい。

1　全能への志向―「最後の太閤」「虚勢」―

太宰治の〝習作〟という場合、一般には「太宰治」の名前で作品が発表される以前の、大正十四年発表「最後の太閤」（青森中学校『校友会誌』第三四号、大正一四・三）から昭和五年発表「学生群一第四回」（『座標』昭和五・一一）までを指す。これらの習作を「初期作品」と捉え、初発期から晩年に至るまで、太宰の作品にある種の連続性が保持されていたことを前提する見方も既にあるのだが[6]、「太宰治」という筆名が用いられ始める昭和八年以後に発表された作品とそれ以前の作品との間の質的差異は、繰り返し検証されるに値する問題を孕んでいるように思われる。

青森中学時代の習作を概括した先行論としては、「生い立ち」という実生活を参照して「後の太宰の文学の根底」がほぼ完成しているという指摘[7]がある一方、一部の作品を除き、多くが「中学生の作文をいくらか文学的に粉飾した程度[8]」であるとの指摘がなされている。中学時代が芥川龍之介や菊池寛の強い影響の下に「自分のものを模索していた時期[9]」であったことは間違いないであろう[10]。

習作の分析に入る前に、明治高等小学校時代の綴方二十編を参照してみたい。これは、中学受験の準備という目的と、従姉の夫の担任訓導（傍島正守）という指導者の存在を割り引いて考える必要があるものの、少年津島修治の心性の一端を伺い知ることのできる貴重な資料である。次に引用するのは、「僕の幼時」（大正十二年一月四日）の一部である。

> 五六才の時から僕は毎晩くたけの所に行つて本を教はつたものだ。始めはハタタコと一字々々に覚えて行くのは僕にとつては又たまらなく面白かつたのである。そして一、二ヶ月の間にどうやら巻一は読める様になつた。学校に入い（ママ）るによくなつた頃にはもう巻三にも手をのばし（ママ）様になつた。うれしくてたまらないから叔母様に読んで見せると必ず昔話一つ知らせて呉れるし、おばあ様に読んで知らせればお菓子を呉れる。母様の前で読んでも何も呉れない。たゞ僕の頭をなでゝ一番とれよと云つて呉れる。姉様兄様に読んで見せてもたゞほめるばかりであつた。僕は昔話は大そう好きであつた。（中略）
>
> 僕の一番家でこはいものは父様であつた。故に父様の前では常に行儀よくして居た。それ程こはい父様でもたまには又大そう好きになることもある。それはよくぴかく光つたおあしや、きれいな御本を呉れるからである。こうゆう風にして僕はすんく成長して来たのだ。今でも叔母様やたけの事を思ふと恋ひしくてならない。

ここでは、本を自力で読めたことに対する肉親・縁者（「おばあ様」「母様」「姉様兄様」「叔母様」）の賞賛がいささか自慢げに回想されている。また、「父様」が「ぴかく光つたおあし」（お金）や「きれいな御本」を「僕」にくれたエピソードも添えられ、自分が裕福な家の子弟であることも無邪気に述懐されている。この「父様」は「一番家でこはいもの」を纏う、威厳のある存在であった。「僕」は「父様」を「大そう好きになることもあ」り、二人の関係は決して険悪ではない。威厳と情愛の同居する家で成長してきたことを振り返り、その家に包摂されていた人々（「叔母様やたけ」）への恋しさを述懐した「私の幼時」は、

とりもなおさず生家に対する「僕」の帰属意識を示したものと言える[11]。

こうした生家への帰属意識を記したものは他にはない。二十篇の綴方は、日常生活での所感、手紙の練習、自己ならびに周辺事物の紹介等の散文の練習から成り、全体を統一する主題があるわけではない。ただ、「僕ノ町」（二月六日）や「僕の学校」（二月七日）のように、生家のある金木町や通学する明治高等小学校への自負が語られているものはある。「僕の幼時」「僕ノ町」「僕の学校」を読む限り、少なくとも、家、地域、学校という自らを取り巻く状況や環境へ調和し、そこに安定した自己の位置を確保しえている様子を窺い知ることはできよう。

太宰治の書いた現存する最も古い習作は、青森中学二年時発表の「最後の太閤」（青森中学校『校友会誌』第三四号、大正一四・三）である[12]。この作品は太閤豊臣秀吉の臨終間際を描いている。先行研究では、「人間存在の不安定」を描いたとする論[13]、生家の先行きに対する太宰の不安を推測する論[14]、太宰と父親との間の屈折した関係の一端を垣間見る論[15]等、臨終の際にある秀吉の姿に否定的なイメージを重ねるものが少なくない。だが、伏見城の大広間に諸侯を控えさせ、「満足気に目をつぶ」って悠然と死に赴かんとする秀吉の脳裏には、死への恐怖や過去への悔恨、後継の憂いといった、感情を惑乱する要素はほとんど去来していない。不快な記憶が一時的に蘇ることはあっても、全体として秀吉は欲したものすべてを手に入れた者のみが味わう「ウツトリ」した恍惚感に浸っている。例えば、山崎の合戦、賤ヶ岳の戦いは次のように回想されている。

> 天正十年のことであつた。山崎で逆臣光秀を討つて主君の仇を報いた時の嬉しさ。彼はたつた今でもそれを味はふことが出来た。
>
> つゞいて起つた賤ヶ岳の戦。それらは皆眼前に幻となつてはつきりと現はれた。彼の口元には勝ほこつた者のやうな微笑が浮び出た。

秀吉は十六年前に光秀を討伐した際の「嬉しさ」を「たつた今」のことのように反芻し、信長の後継者としての地位を固めた賤ヶ岳の戦いの勝利の光景も、「眼前に」「はつきりと」見ている。これらは忘却されかけた遠い過去の記憶の回復ではなく、両度の合戦以来現在に至るまで持続する勝利の感覚である。この後、「小牧山の戦」で「徳川公」を滅ぼすことができずに和睦を申し込んだ際の苦い記憶が蘇るが、秀吉の口から漏れ出た「わしともあらうものが…」という「ひとりごと」から推察できるように、この記憶は条件さえ整っていたならば為し得たはずのことを完遂できなかった悔しさから滲み出たものであり、勝利への意志は失われていない。そして、この苦い記憶は、自らの全能感を確認する呼び水となっていく。

> 関白―太政大臣、彼の栄達は実に古今に類がなかつた。あの当時の彼の勢。彼は今それを思ひ出したのである。自分でさへ自分自身の勢が恐ろしくてたまらなかつた位であつた。彼はもうたまらなくなつてウーとうなり出した。聚楽第の御幸！　文武百官を率ゐて諸侯と共に『天皇をうやまひ申す』との誓ひを立てた時の有様は……おゝ彼の目は涙でうるんで居る。太閤は心から泣いた。

「恐ろしくてたまらなかつた位」の過去の勢いを追想する秀吉に、語り手は「彼の栄達は実に古今に類がなかつた」と賛辞を送り、語りは秀吉の全能感を表象することに焦点化されていく。現実の「聚楽第の御幸」は、秀吉が伝統的な支配権（「関白―太政大臣」）を利用して諸大名に自分への忠誠を誓わせる政治的パフォーマンスであつたが、「最後の太閤」における「聚楽第の御幸」は政治性を脱色され、臨終の床にあつてすら権勢の絶頂にあつた時の感覚に秀吉が固執し続けていることを印象づける挿話となっている。

この全能感は「朝鮮征伐」の失敗の記憶により再び中断されるものの、程なく秀頼の幻影が恍惚感を呼び醒まし、しまいにそれは「大声でウハツハツハツハツハツと笑ひこけてしま」うまで昂揚して、枕頭に侍る者や諸侯を驚かす。最後に語り手は「一世代の英雄太閤」に「華やかなりし彼の一生よ」と賛辞を送って、「微笑を浮かべ」たその最期を書き取る。死に臨んだ秀吉が自らの生を全面的に肯定し、死をも恐れ

ないという経過は、秀吉の全能感とそれに由来する恍惚感を描くことが作者の主要な関心となっていることを示していると言えよう。

全能への志向は、「最後の太閤」の次に発表された戯曲「虚勢」（『星座』大正一四・八）でもその一端を確認することができる。「虚勢」は視力の回復がプロット進行の鍵となっている。両親の顔すら知らずに育った盲目の貞一にとって、視力の回復は全能感の獲得に近い喜びであったはずである。また、父の家督を引き継いで何ら負い目なく生きられるという自覚が、幸福感を更に昂進させてもいいはずである。しかし、「虚勢」での全能感の享受は、著しく屈折している。貞一は治療を受けさせてくれた両親に感謝するどころか、視界に映るすべてのものへの幻滅を挙げ連ね、元の如く盲目に戻りたいと僻事を述べ立てて両親を怒らせてしまう。後に「虚勢」は、貞一が「継子」として「世間によくある通り心がネヂケて居た[16]」と著者自身によって自作解説を施されることになるのだが、その「ネジケ」方は異様である。

磯田光一は、視力を回復した貞一の示す醜いものへの嫌悪の中に、母は「天女」、「父」は「〝家霊〟の象徴」でなければならないとする信念があったとし、「少年期の太宰の心に潜在していた〝ザイン〟と〝ゾルレン〟との裂け目」を読み取っている[17]。五十嵐誠毅氏は「弱者の劣性心理と弱者の優勢心理という重層的な屈折[18]」を確認し、西田りか氏は「類い希なる継子想いの継母を持ちながら、逆にねじ曲がって暴走する自尊心」に貞一が振り回されていると指摘する[19]。「〝家霊〟の象徴」への執着や心理の「屈折」、自尊心の「暴走」を生ぜしめたものは何であろうか。視力回復後に、貞一は母に向けて次のように言い放っている。

> （貞一）（勝ちほこつた者のやうに、それでも尚、悲しい、気どつた表情で、どうすることも出来ないかのやうに、頭を両肩の中にはさみながら、ゴロリと仰むけに寝て、又、キザな口調で）一体、僕あ、どうすればいゝんだ。オイ、僕のお母さんだと云ふ女、僕はあなたをどうしたつてお母さんとは呼びたくない。今日と云ふ今日は、あなたの心がシンカリわかりました。継子は憎いものでせう。併し、いくら継子が憎いといつても、これぢや、あんまりひどいではありませんか。成程よく考へてやつたものですネ。世間からは、あなたは継子の盲なのをなほしてえらいと言はれるし、そしてその陰で僕が泣いて居るのだ、フン、えらいものですネ。

視力の回復を喜んでいるにもかかわらず、言いがかりとも言える非難の言葉を言い放つことで、貞一は母親に道徳的な負債を背負わせている。貞一の言う「あなたの心」（継子憎悪）とは虚構であり、そうした後妻の陰険な心を捏造することにより、貞一は家での跡取りとしての地位を絶対的なものにする。「虚勢」は、「継子」で「盲目」であった貞一が健常な家督の相続者に反転していく際の全能感を、「継母」を告発することによって得てゆくという歪みを、プロットの毒として含んでいる。

2　価値転倒的操作の萌芽―「地図」「負けぎらひ」「敗北」―

中学時代の作品に於いては、勝負に対する強い関心が一つの特徴をなし、特に大正十四年発表の作品では、自らと関わる相手に対して最終的な優越感を得ようとする傾向が顕著である。

琉球王謝源を主人公とした「地図」（『蜃気楼』大正一四・一二）について、藤原耕作氏は「琉球史の史実とは基本的に無関係なところで構想された作品」であるとして、その虚構性を指摘している[20]。このことは、琉球王謝源の形象を借りながら、史実に基づいた筋立てとは別のプロットが伏在している可能性を示唆する。

「地図」の冒頭は、琉球王謝源が石垣島の征服に成功してから十日後の宴席の場面である。謝源は「今宵程自分といふものが大きく思はれた時はなかつた」のであり、歓喜の絶頂にいる。この歓喜は、三度の「大敗の憂目」を克服し、「五年の長い歳月」をかけて得られたものであり、「最後の太閤」での栄光の回想によって齎された恍惚より遥かに生々しい。

彼は満足げに大杯を傾けて居た。彼は下座で騒いで居る家来達をズッと見廻した。その時の彼の眼には、もう家来なんぞは虫けらのやうに見えて、しやうがなかつた。（中略）まだ月が出るに間があるのか、だゞまつくらで空と大地との区別すらつかない程であつた。彼はその空を見て居るうちにもう、その空までも自分が征服してしまつたやうな気がした。勝つた者の喜び!!　彼はそれを十二分に味つて居た。

「家来達」を「虫けら」のように見下し、地上のみならず「空」までも「征服してしまつたやうな」心持ちがするほど、謝源の気分は「勝つた者の喜び」で昂揚している。この全能感は、苦難に耐え抜いて勝ち取つた勝利の裏付けをもつているだけに、自尊心と分かちがたく結びついて、謝源の全身を領している。その謝源に「蘭人」が「戦勝の祝の品」として「世界の地図」を献上する。自国の領土と征服した石垣島が大きく掲載されているであろうと期待した謝源に、「地図」はその領土が「あまり名の知れてない、こまかい国」ゆえに「地図」に掲載されない「小さな島」にすぎないことを知らしめ、謝源の全能感を相対化してしまう。全能であることの恍惚と、「地図」に登録されることのない小さな領土を「五年もかかつて」「やつと占領した」徒労感との間の落差を埋めるものは何もない。謝源は「自分の力に全く愛想をつかした時程淋しいことはあるものでない」と感じて「乱行」を犯すようになるが、それは単なる自暴自棄による愚行では決してない。

こんなフウだつたからそれから一年もたゝぬ中に石垣島のもとの兵に首里が襲はれて易々と復讐されたのは言ふまでもないことである。併し謝源は少しも残念がる様子もなく或夜コッソリと一そうの小舟で首里からのがれて行つた。

「復讐」されても「少しも残念がる様子もなく」島から逃れ出る謝源の小賢しさこそ、「地図」の眼目と言えるだろう。相馬正一氏は「地図」と菊池寛「忠直卿行状記」との類似を指摘し、「明らかに太宰が「忠直卿行状記」のパターンを借りて「地図」を書いた[21]」と述べている。確かに、大坂夏の陣での家臣の働きが「凡て自分の力、自分の意志の反映であるやうに思はれた[22]」忠直卿と、石垣島征服に成功して空まで征服したと錯覚するほど「自分といふもの」を大きく感じた謝源との相同性は明白である。また、禍福の試合での勝利が家臣の手加減によるものであつたことを知り、「癒しがたい淋しさの空虚が、忽然と作られて居る激怒」に身を震わせる忠直卿と、自国が「あまり名の知れてない、こまかい国」であると「蘭人」に告げられて「致命的な侮辱」と淋しさを感じる謝源とが、共に全能感を喪失し、侮辱に耐える立場へと転落していく道筋も同じである。しかし、家臣との間に身分差を超えた人間としての対等な付き合いが可能かどうかを確かめようとするあまり、却つて深い猜疑心に捕らわれ、度の過ぎた乱行を重ねて改易されてしまう忠直卿と、報復を待ち望んでいたかのように「易々と復讐され」、「少しも残念がる様子もなく」島から密かに逃れていく謝源とでは、乱行を犯した意図が根本的に異なつていると言わねばならない。

自国が「地図」にさえ載つていない小国であるという事実を変えることができない以上、謝源は事実の解釈の仕方を変えようとする。謝源は乱行を犯して統治を放棄し、石垣島の王に「易々と復讐され」たが、その代わり、「地図」に登録されていない、従つて世界に存在していない島の征服という愚行に血眼になる石垣島の王の滑稽を、傍観して嘲笑する歓喜を手に入れたのである。だから、石垣島の王の屋敷に「その頃の日本では、なかなか得ることの出来なかつた世界の地図」を落としていつたのは、謝源以外に考えられない。謝源はわざと敗北することによつて相手の勝利に意味がないことを知らしめ、相手の勝利を相対化できる立場に立つことで自尊心の満足を得、一度手にした勝者としての優越感を再び取り戻そうとしたのである。

太宰が敗北の意味をどのように捉えようとしていたのか更に検討する材料として、「負けぎらひト敗北ト」（『蜃気楼』大正一五・一）を取り上げてみたい。此作は四篇の作中作から成る。嫌つていたはずの子守唄

を知らないうちに口笛で吹いてしまつた「快活」な「敗北」を描く「(一)子守唄」、ライバルの「彼」に比べて自分の実力が劣ることを認めつつ、「彼」の当選作を載せた雑誌の価値を貶めて勝利を感じる「私」を描いた「(二)入選」、政敵の「負けぎらひ」の強情さに恐れをなして市長選への出馬を取り止める男を描いた「(三)ワルソーの市長」、「利造」を口先でやり込めた「彼」が「利造」の日記を読み、勝つたつもりになつていた自分の愚かさに気づいて大敗したことを悟る「(四)日記帳」、以上の四篇である。

各篇を検討する前に、勝負に敗北した際の一般的な心理について考えてみたい。この場合、四つの型が考えられる。

① 敗北の事実を認め、敗北の原因が自分の側にあると認める自罰的傾向。相手が自分より優れていることを素直に認める場合がこれにあたる。

② 敗北の事実は認めるものの、その原因を自分以外の外部の人物や状況のせいにしようとする他罰的傾向。自分の敗北は予期できなかつた外部要因のせいであるから、敗北は自分の実力と関係のない出来事となり、自尊心は傷つかない。

③ 敗北の原因を自分の側にあるとも外部にあるともしない無罰的傾向。勝敗は自己の能力を超越した存在によつて予め決められていたとする決定論、または、勝利にも敗北にも何の意味もないとするニヒリズムがこれにあたる。

④ 敗北に際し、その原因の所在を問題にするのではなく、敗北という事実の解釈を変えてしまう価値転倒的傾向[23]。勝者は強いから勝ち、敗者は弱いから負けたのであるが、強いことは悪であり、弱いことこそが善であるとして、敗北を最終的に勝利へと価値転倒してしまう形而上学的操作がこれにあたる。

以上に基づき、四つの作中作を分類すると、「(一)子守唄」と「(三)ワルソーの市長」は①自罰的傾向に、「(二)入選」と「(四)日記帳」は④価値転倒的傾向に分類できる。

「(二)入選」に於いて、「私」は自分の実力が「彼のに較べて劣つて居ることをシミジミと感じ」、「完全に負けてしまつた」ことを認め、しかも「再び立つことが出来ない程ひどく打ちのめされて」いた。即ち「私」は自分が敗者であり、実力が「彼」に劣ることを熟知している。にもかかわらず、「私」の心に兆してくるのは「負けぎらひな悪魔的な心」なのであつた。

> 私は彼の顔を見上げました。勝利者の顔とはこんなのを言ふのでせう。その顔には少しの暗い影も見当りません。全く晴れ〻〻して居ました。この時私は又例の負けぎらひな悪魔的な心をムクムク起してしまひました。自分ながら驚く程おちついた口調で『アヽあの雑誌へか……それアよかつたネ、だがそんなに嬉しいかい。あんな雑誌へ……大人気もない。それはそうと僕の「公論」に投書した創作はどうしたかしら』と冷やかに見事に言ひ放つて、ブルブル唇を変に動かして居る彼の顔を意地悪く長い間見上げて居ました。

「私」は「勝利者」である「彼の顔」を見て「負けぎらひ」な心を起こしたが、それは敗北の原因を自己の内部に探して克服し、次回の雪辱を期すという類の自罰的心理とは全く無縁である。「私」は「彼」の入選作の掲載誌を「あんな雑誌」と蔑み、程度の低い雑誌に採用されて「そんなに嬉しい」素振りを見せる「彼」の態度を「大人気もない」と窘める。そして、「あんな雑誌」より「公論」に「投書」した自分の方が高い潜在能力があるかのように装い、「彼」の当選作の価値を貶めてしまう。本来価値のあるものを無価値なものへと転倒し、実質的には何も価値あるものを生み出していないにもかかわらず、相対的に自分を優位に導こうとする「私」の「負けぎらひ」な心は、確かに「悪魔的」である。

「私」は、現にある自分と「彼」との勝負の場（「彼」が繰り返し入選した雑誌）の価値を相対化する新しい勝負の場（「公論」）を我に捏造することによつて、「彼」の入選作の価値を貶め、敗者であつた自分が勝者となる価値転倒的操作を施したのである[24]。現にある価値を否定し、否定の理由を相手が認めざるを得ないような空間を捏造する操作は、極めて形而上学的である。これに打ち克つ方法は、ニヒリズムか、

あるいは、相手の産み出した価値を再転倒する更なる形而上学的操作しかない。しかし、それを為し得るには高度な知的操作が必要であり、一度転倒された価値を再び転倒し直し、元の勝負の場に戻して価値を判断することは困難である。「私」の勝ち方は倫理的な奥の手を用いた方法であって、まさに「悪魔的」としか言いようがない。しかも、この心のありようは自覚され、習慣化（「例の」）されている。

「(四)日記帳」は、「人並はづれて負け惜しみな性質」の利造が、いつもやりこめられていた「彼」に意趣返しをし、「彼」に「大敗してしまつた自分をシミ〴〵と意識」させる話である。「弁論部の幹事」である「彼」は「口先の方」に「可成自信があつた」ので、「激すれば必らず吃つてろくに言へなくなる」利造の弱点を衝いてその非を責め立てた。利造は一度「彼」に屈し、目に涙を浮かべてしまうのだが、思わせぶりな態度で日記を書いて「彼」に盗み見させ、「彼」を「畏」に陥れる。

利造が「彼」の「口先」に勝つためには、「彼」の「口先」による攻撃など全く効果がなかったことを「彼」に納得させ、勝ったつもりになっている御目出度さを「彼」に知らしめてやればよい。利造が日記に記したのは、次のような文言であった。

『……十月二日、晴。昨夜活動に行きたるせいか眠し。あくび連発す。今日新らしい英語の先生見ゆ、発音男性的なるに満足せり。』

利造は日記の中に眠気や新任教師への満足感だけを記し、「彼」との間に何も起こらなかったことを眼目押しするかのように「気分大いによし」と結んだ。利造は、一度敗北した「彼」との勝負（口先でのやりとり）の価値を相対化する新しい勝負の場（「日記」）を捏造し、「彼」の「口先」の勝利が「彼」の思い込みにすぎないことを知らしめてその「勝利の喜び」を無効にし、それにかわって、「彼」の攻撃など全く意に介さない自分を勝者とする価値転倒的操作を施したのである。

「地図」及び「負けぎらひト敗北ト」の「(二)入選」「(四)日記帳」の価値転倒的操作は、登場人物のレベルに於いては最終勝利を目論む者の手の内が巧妙に隠蔽されているが、対読者のレベルに於いては、価値転倒的操作の介在を積極的に暴露することに重きが置かれている。価値転倒的操作の要は、転倒された価値を、それが転倒されたものであると気づかれることなく、相手の内面に刷り込んでいくところにある。初期習作の価値転倒的操作は、操作の痕跡が明瞭に作品内に残っているという点に於いてまだ試行の段階であり、それゆえ萌芽的段階にとどまっていると言えよう。

3　否定の機序―「私のシゴト」―

初期習作に於ける登場人物は、全能であることを志向しつつも（「最後の大閤」）、自分の能力が決して全能ではないことを理解していた（「地図」）。その理解のもと、なお相手に勝つ機会が窺えるならば、世上での価値を転倒して相手の勝利の価値を貶め、転倒した価値を相手に肯定させる論理や戦略を準備する（「負けぎらひト敗北ト」の「(二)入選」・「(四)日記帳」）。自分の能力と立場を正確に測定し、緻密な計算によって状況を切り開いていく点で、初期習作の登場人物たちは理想主義とは対極の現実主義的傾向が濃厚である。初期習作の登場人物たちは決して現実に適応できない敗北者・逸脱者ではない。むしろ、現実の反応を逆手にとって自己の優位を確保するしたたかさを備えている。

次に「私のシゴト」（『蜃気楼』大正一五・一二）を題材として、初期習作の中で現実がどのように取り扱われているかについて分析してみたい。「私のシゴト」は、創作の構想ノートといった趣の作品で、六つの或る状況を仮設し（うち一つは「虚勢」の自作解説）、通常とは異なる反応を示す人物を仮構したものである。最初に「私」が過去に書いたという戯曲（「虚勢」）が取り上げられ、解説が加えられている。

継子は世間によくある通り心がネヂケて居た。（中略）継母が夫に勧めて、その医者に継子の目を見て貰ふようにする。不思議にも目が直る。継子は無論嬉しかったのだが継母の恩を被りたくないばかり

に心にもないことを言ふ。即ち『自分は盲目の時にはこの世の中のことを皆美化して考へて居たが眼を開いて見たら、綺麗だらう気高いだらうと思つて居たものは皆きたない、いやしいものばかりであつた。あまりの幻滅に俺は今気が狂ひそうだ。あゝ俺は盲目であつたならば、もとのやうな盲目であつたならばどんなに幸福だつたのだらう』『俺の目をなほして呉れた奴は誰だい』なんて泣くことをいふ。

これによれば、「継母」の善意で視力を回復した「継子」は「無論嬉しかつた」のだが、「心がネヂケて居た」ので「心にもない」悪態を吐き、「継母」の憎悪を掻き立ててしまつたのだという。「継子」が視力の回復を喜んでいることは自作解説の中で確認されているし、実際の戯曲「虚勢」でも、盲目に戻そうとする父親から逃れる「継子」が「せつかく眼がなほつて」と漏らしていて、盲目が本意ではないことは明らかである。「継子」が視力回復の喜びを十分に味わっていることは明白であり、一般的な心情からすれば、目の治療を父親に勧めてくれた「継母」に感謝の気持ちを抱くのが自然であろう。にもかかわらず、この戯曲では、「ネジケ」た心ゆえに「継子」は「心にもないこと」を言つて「継母」を告発してしまう。このねじれ、即ち、「継母」との間に「恩を被りたくない」ような個別の事情がないにもかかわらず、「心にもない」言葉を発して、「虚勢」を張ってしまうところがこの戯曲の最大の特徴である。そして、このねじれは、目が見えるという現に抱いている喜びや継母への感謝といった一般的心情の強引な否定によって作り出されている。

否定する実質的理由がないにもかかわらず、現実（法・出来事・通念・規範）の側を否定するという機序は、「私のシゴト」で構想されているすべての話に共通している。弟を殺した「A」の裁判の話では、「裁判長」が法を否定して「A」への「同情」を示し、殺人を認めていくし、「刑事」が悪事を働く話も、有能な自分に関心を示さない世人の否定がプロット展開の要とされている。仇討ちの話も、仇討ちの宿願を成就したところで話は終わらず、男が仇討ちの成功を自ら否定するし、秘密を握られた「B」が「A」の死を嘆く話では、「A」の「徳化」という常識的な見解が否定されている。最後の夢の話も、体面の重視という武士の規範を否定し、体面より実質を重んじて国の改革を果たした大老の姿を提示する。

以上の六つの話に共通するのは、世上の常套的な反応を仮定した上で登場人物にそれを否定させ、通常とは異なる反応を取らせている点である。これにより、既存の価値や一般的な期待とは別の有り様が示される。価値転倒的な操作も、状況と心理との通常の結びつきを切断し、既存の価値を否定しようという意志なくしてはそもそも発想されないことを考えれば、「私のシゴト」に於ける否定の機序への関心は、「負けぎらひト敗北ト」での価値転倒的操作の試みと重なりを持つとも言える。更に一歩踏み込んで言えば、確固たる信条あるいは生理的好悪とは無関係に、現実の側（法・出来事・通念・規範）を否定する筋立てを並列するという「私のシゴト」の構成は、否定という形式を内容に先行するものとして独立に扱おうという野心的構想を開示したものと見なすこともできる。これらを自分の果たすべき仕事と捉え、小説の骨法として確認していくことの意味は決して小さくはない。

4　結語

本稿はこれまで「最後の太閤」「虚勢」「地図」「負けぎらひト敗北ト」「私のシゴト」を分析し、大正十四年から十五年にかけての初期習作の特質として、全能への志向、価値転倒的操作、否定の機序について確認してきた。以上を踏まえた上で再び本稿冒頭の三島の太宰批判に戻ると、太宰の価値転倒的操作ははじめから「弱点をそのまま強みへもつてゆかうとする操作」だったのではなく、むしろその反対に、「負けぎらひ」な心理を前面に押し出し、最終的勝者を目指す精神の運動として始まったということになる。本稿では青森中学時代に書かれた習作のうち、「私のシゴト」（『蜃気楼』大正一五・二）以前の、大正十四年から十五年初めにかけて発表された五つの作品しか考察の対象に入れていないが、これ以後に書かれた「針医の圭樹」（『蜃気楼』大正一五・四）、「瘤」（『蜃気楼』大正一五・五）、「将軍」（『蜃気楼』大正一五・六）、「哄笑に至る」（『蜃気楼』大正一五・七）、「口紅」（『青んぼ』大正一五・九）、「モナコ小景」（『蜃気楼』

大正一五・一一）、「怪談」（『蜃気楼』大正一五・一二）、「名君」（『蜃気楼』昭和二・二）を確認しても、自己の脆弱性を核とする作品は書かれていない[25]。確かに、太宰は価値転倒的な枠組みを初期習作の段階から具有していたが、それは敗北しないための操作だったのである。敗北してもなお弱い自分を肯定し、信じ切っていくためには、勝つことを志向するのとは別の内面の操作が必要である。従って、自己を現実世界に適応できない存在として規定し、敗北することや弱いことに価値を見出すという、後に太宰が作品の中で採用していくことになる方法は、初期習作の基調をなしていた勝利への志向性とは別に、青森中学卒業以後のどこかの段階で、意識的に獲得されたものなのである。

青森中学以後の習作の詳細については、別稿を準備して論ずることとしたい。

注

1 『太宰治論』（近代生活社、昭和二一・二）、15頁・74頁。
2 「太宰治論―道化の古典主義」（『文学・この仮面的なもの』勁草書房、昭和四四・七）
3 『小説家の休暇』（講談社、昭和三〇・一一）。引用は『決定版 三島由紀夫全集』第二八巻（新潮社、平成一五・三）に拠り、ルビは省略した。
4 本稿で用いる「価値転倒」という用語は、ニーチェが「道徳の系譜」（『ニーチェ全集第三巻（第Ⅱ期）』白水社、昭和五八・三）及び「アンチクリスト」（『ニーチェ全集第四巻（第Ⅱ期）』白水社、昭和六二・二）で展開した価値転倒的道徳批判を踏まえている。「価値転倒的操作」とは、三島の批判にあったように、本来は〝強い〟ことが〝よい〟ことであった価値を、ある意図のもとに、〝強い〟ことは〝悪い〟ことで〝弱い〟ことこそが〝よい〟ことであるとする価値に転倒し、その転倒された価値を人々の内面に巧妙に刷り込んでいくような操作を指す。
5 『太宰治論』（講談社、昭和五一・一二）、16頁。
6 筑摩書房版第十次『太宰治全集』（平成元～四）では、大正十四年から昭和五年発表の作品を全十三巻中の第十二巻に「習作」として収載していたが、同社第十一次版『太宰治全集』（平成一〇～一一）では、それらの「習作」を全十三巻中の第一巻に「初期作品」として収載している。坂根俊英「太宰治「初期作品」論―「地図」まで」（『広島女子大学国際文化学部紀要』11、平成一五・二）は、大正十四年から昭和五年発表の作品を「初期作品」とすることは「定説」だとする。
7 鳥居邦朗「太宰治における文学精神の形成」（『国語と国文学』昭和三四・一一）
8 相馬正一「初期習作―大正十三年から昭和七年まで―」（『作品論太宰治』双文社出版、昭和五一・九）
9 渡部芳紀「習作期の太宰治」（『解釈と鑑賞』昭和四九・一二）
10 松本和也「〈見られること〉の行方―津島修治・前期習作論―」（『文学研究』90、平成一四・四）は、「太宰治」という名前が、その筆名を用いる以前の津島修治をめぐる諸事情をも事後的に領有していった歴史をその起源と共に自明のこととして受け入れてしまうことへの注意を促している。松本氏の問題提起は習作を論じる際に第一に踏まえるべきものである。
11 安藤宏「〈自尊心〉の二重構造―旧制中学時代の太宰治―」（『芸術至上主義文芸』23、平成九・一二）は、この綴方を根拠とし、津島家への強固な帰属意識が中学入学以前の太宰の自尊心の基盤を形作っていたと指摘している。
12 平成二十一年、太宰が十六歳の時に書いたとみられる未発表の詩「試合と不平」とエッセイ二篇を含む計四篇の直筆原稿が新たに発見された（平成二一・六・二〇付『日本経済新聞』）。記事には未公開エッセイの一部として「僕は悲観をしない。僕はまだ細いながらも自信があるからだ」という部分が紹介されており、公開されれば太宰の強い自負心を知りうる資料となりうる可能性がある。
13 山内祥史「習作の意味―「地図」までの検討を通して」（『一冊の講座 太宰治』有精堂、昭和五八・三）
14 長部日出雄『辻音楽師の唄』（文芸春秋、平成九・四）67頁。
15 五十嵐誠毅『太宰治〈習作〉論―傷つく魂の助走―』（翰林書房、平成七・三）156頁。
16 「私のシゴト」（『蜃気楼』大正一五・二）
17 「〝家霊〟探索者の運命―太宰治再考」（『国文学』昭和四九・二）
18 注15掲載書、57頁。
19 「太宰治　習作の女性像―習作期における〝助走〟と〝跳躍〟をささえたもの」（『解釈と鑑賞』平成一九・一）
20 「習作期の太宰治―中学時代を中心に―」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』28巻1号、平成一八・四）
21 注8に同じ。
22 「忠直卿行状記」の引用は『菊池寛全集第二巻』（文藝春秋、平成五・一二）に拠った。
23 注4参照。
24 ここでの価値転倒的操作については、永井均『これがニーチェだ』（講談社現代新書、平成一〇・五）

40～41頁の解説を踏まえている。

[25] 本論部分では取り上げなかったが、「私のシゴト」以前に発表された「角力」（青森中学校『校友会誌』大正一四・一〇）、「犠牲」（『蜃気楼』大正一四・一一）の登場人物について確認しておく必要があろう。「角力」の「誠二」は兄にわざと負けてやれるだけの強さを備え、「信ちゃん」により本当は兄より強いことが確認されている。また、「犠牲」の「誠二」は友達に怪我をさせたと思い込み苦しみはするが、実は他人の過失を知らぬ間に引き受けていただけで、潔く自らの過失を認めたことを友人たちから賞賛される。いずれの習作も脆弱な自己をモチーフとはしていない。

※太宰治の作品の引用は、第十一次筑摩書房版『太宰治全集』（平成一〇～一一）に拠り、旧字体は新字体に改めた。